

詩編 66:16

「喜びを分かち合う」

2026年4月12日(主の日)

藤沢北教会牧師 長倉基

毎年度4月の最初の主日には、その年度の年度聖句を御言葉として聞き、主題についての説教をしています。今年度は先週の第一週はイースターの主日でしたから今日がその日になります。今年度はこの詩編66:16の「神が私に成し遂げてくださったことを語ろう。」という言葉が年度聖句とし、「喜びを分かち合う」を主題としました。神が私に成し遂げてくださったことがわたしたちの喜びであってその喜びを語る、ということです。もともと伝道ということ意識して長老会でいろいろ検討した結果きまったものです。けれども改めてこの詩編を読み、また聖書全体に思いをはせた時にわかることは、神が成し遂げてくださったことを喜びとして語る、というのは、主イエスが教会にお命じになった、いえ、そのために教会をお立てになったとすら言ってよい、わたしたちの信仰生活の根本的なことだ、ということです。そしてその喜びとは何か、結論を先に言うようなことになりますけれど、主イエスそのもののことです。主イエスご自身をこのわたしの喜びとして伝える、これがわたしたちが語るべきことです。今日はこの詩編66編、そしてもう一箇所新約聖書を読みます、この聖書のみ言葉を通して、その原点に立ち帰りたいと思います。神がわたしたちに成し遂げてくださったこととは何か。そしてそれを語るとはどういうことか。一緒に聖書に聞いていきましょう。

先週はイースターの主日礼拝をおささげすることができました。神の子でありながら地上にまで降りてくださり、わたしたち人間と同じ体になられた主イエスは、人間から苦難を受け、十字架につけられて死なれました。神はその主イエスを復活させられました。これが復活祭、イースターです。十字架によって人間の罪が赦され、復活の命によってわたしたちは神の子として、つまり神に愛されている人として歩むことができるようになりました。このことが今日の詩編66にも全体として語られています。この詩編は全体として神への賛美への招きですけれど、そのために神のなされた御業を歌いあげるのです。前半にはこのような言葉があります。「来て、神の業を見よ 人の子になされた恐るべき業を。神は海を乾いた地に変えた。人は大河を歩いてわたり そこで、私たちは神を喜び祝った。」また、「私たちは火の中、水の中を通ったが あなたは私達を広々とした地に導き出された」と神の御業をほめたたえます。神がこの世界を作られた世界の創造主であられると同時に救いの神であられることを歌います。救いについては、海を割ってエジプト軍から逃げ、荒れ野を旅した出エジプトの救いの出来事や、国が滅びてバビロンに連れて行かれた後、解放されてまたユダの地エルサレムに戻ってこられたことを思い起こしているのでしょう。神の民イスラエル全体の救いが語られます。わたしたちは神の救いを主イエス・キリストの十字架に見ます。あの悲惨な十字架が、人間全体、信じる者に与えられる罪の赦

しだと信じます。奴隸の地エジプト、囚われの地バビロン、わたしたちは罪の奴隸であり罪に囚われていたのを主イエスが十字架によって救い出し、解放して自由にしてくださったと信じます。

この人間全体に差し出された罪の赦しが、自分の赦しであるというのがわたしたちの信仰です。19節「まことに神は聞き入れ 私の祈る声に心を向けてくださいました。神をたたえよ。神は私の祈りを退けず 慈しみを拒まれませんでした。」わたしたちの神、救いの神は、わたし個人の嘆きも聞いてくださり、救い出してくださいます。予告しましたように、次週は洗礼式が行われる予定です。3月29日に長老の試問を行い、長老たちは信仰とはなにか救いとはなにかということを問い、受洗志願者に語っていただきました。これまでの受洗準備会でわたしが中心としてきたことは、「教会の信仰を自分自身の信仰として受け入れて告白する」ということです。たとえば「イエス様は立派な方なのでついていきます。それが私の信仰です」、とだけ言われても洗礼を授けるわけにはいきません。

「キリストの十字架が罪の赦しであり、それこそが私の罪の赦しなのです。そういう意味でイエス様は救い主です」。もちろん言葉はそのままでなくていいのですが、この教会が2,000年受け継ぎ、語り継いできた信仰を自分の信仰として受け入れて告白することを目指して、学びとそして祈りの時を過ごしてきました。この度、はっきりとそう告白し、洗礼をして教会に入会することでキリストの体に連なり神と人を愛する生き方を求めて生きることを告白なさったので洗礼に至ったのです。当然、すでに信仰生活をしているわたしたちもその信仰の中心は主イエスを救い主と信じる、十字架の罪の赦しを信じるということです。そして、この救いに入れられたわたしたちは、それを自分一人だけのものとすることはできません。そのことを、最初の教会の姿の中に見てみましょう。新約聖書を読みたいと思います。使徒言行録4：10～20。＜朗読する＞。生まれつき足が不自由だった人がペトロとヨハネを通して働いた神の力によって癒されました。二人は「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」と命じるとその人は歩き出したのです。ところがこのことを巡って、二人はユダヤの指導者たちから尋問を受けなくてはならない事態に陥りました。あの十字架で死んだ主イエスの復活を宣べ伝え、多くの人たちが信じて従うようになっていたからです。囚われて尋問を受けているのに、主イエスの名を語り「救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間にはあたえられていない」と堂々と語る二人の姿は立派に見えるかもしれません。自分は同じように証しし、伝道することなどともできそうにない、と思うかもしれません。けれどもペトロをそこに立たせたのは、彼自身の勇気や信仰の強さではありませんでした。その秘密は、ペトロが今立っているその場所にあります。ペトロは今、エルサレムで議員、長老、律法学者の前に立たされて尋問されています。ここは、かつて主イエスが十字架の直前にお立ちになった所です。指導者たちの前で死を覚悟しないといけなかった所に今ペトロ自身が立たされています。けれども、あのときは、ペトロは建物の外で、主イエスを知らないと言ったのでした。ペトロはここで、あの時の自分を思い出したに違いないし、主イエスのことを切実に思い起こ

していたに違いありません。あの時ペトロは主イエスを知らないと言いました。今は、違います。主イエスの名を堂々と宣べ伝えているのです。あの時の罪が赦された、ペトロは主イエスの十字架によってここに立っています。当然ペトロは自分の力や意志でここに立っているわけではありません。主イエスの十字架と復活の力によって立たされているのです。だからペトロは「この人による以外救いはない。救われるべき名は天下にほかにない」と堂々と証しすることができました。語らずにいられないのです。わたしたちの教会も、ペトロと同じように罪を赦され主イエスの命によって立ちます。神によって立たされた教会がどのような歩みをするのか、この最初の教会の記事ははっきりと教えてくれます。「主イエスこそが救い主である。わたしも主イエスに救われた。」語らないわけにはいかないのです。

この箇所を含む一連の出来事を記砂かで「堂々と」という言葉が3回でてきます。今およみしたところにある指導者たちの尋問に対してペトロとヨハネが堂々とした態度でいた姿を人ビタがみたこと（13越）、もう一箇所はこの尋問から解放されて二人が仲間のところに行き、みんなで祈りました。その祈り中に「あなたの僕たちが、堂々と御言葉を語れるようにしてください」という言葉があります。そして、祈りが終わるとそこにいた一同は聖霊に満たされて、「堂々と」神の言葉を語りだした、と記されます。新共同訳聖書では「大胆に」となっていました。この言葉は、態度の立派についての言葉ではありません。「自由に、何も怖れることなく」という意味の言葉です。そういう意味で堂々としており、大胆なのです。ペトロはあの夜「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と言われた時、怖れに支配され、語る自由を失いました。そして「そんな人は知らない」と言ってしまったのです。けれども、赦され救われ、聖霊を注がれた今は、怖れることなく自由に主イエスの名を語る事ができるようになりました。「堂々と御言葉を語れるようにしてください」という祈りは、この時のペトロとほかの弟子たちだけの祈りではありません。その後の時代のすべての教会、そしてそれに連なる今を生きるわたしたちの祈りでもあると思うのです。なぜならいつの時代どんな場所でも福音を妨げる力、神の言葉を語らせまいとする力が存在するからです。権力者はいつも自分の立場を脅かすものに敏感です。教会に、キリストのその力を見て、押さえつけて黙らせようとした世の権力は、いくらでもあります。日本だって例外ではありません。そのために実際に人の命も奪われたのです。幸い現代の日本では、当局から公然と押さえつけられるようなことはないでしょう。けれども、福音を語らせまいとする力は、権力という形だけではありません。『また教会の話?』という身近な人の一言、職場や学校での『浮いてしまうかもしれない』という怖れ、そういった空気の中でわたしたち自身が口を閉ざしてしまうのです。それは態度を立派にすれば打ち破れるものではありません。『主よ、あなたの僕たちが堂々と御言葉を語れるようにしてください』と主を頼って祈り続けるほかないのです。

主が成し遂げてくださった業を語る姿をもう一つ詩編66編に見たいと思います。創造と救いの神を賛美した民が神殿に入って誓いを果たす決意が語られます。誓いとはいけに

えをささげて礼拝することです。苦難の中で、「神よここから助けていただいたあかつきには必ず神殿に上ってあなたにいけにえをささげます」と約束したのです。そしていうのです。「神を畏れる人はすべてここに来て、聞け 神が私に成し遂げてくださったことを語ろう」これもわたしたちの信仰の姿につながります。私達の礼拝の姿です。神が救いを成し遂げてくださった。そう信じる者はまず礼拝をするのです。わたしたちも同じです。主イエスの十字架と復活によって罪を赦され、死から命へと導き出された。その救いを信じる者が、まず神の前にひれ伏し、礼拝するのです。礼拝とは、神が成し遂げてくださったことへの応答です。わたしたちが礼拝のためにここに集まるのは、義務を果たすためでも、習慣のためでもありません。神がわたしに成し遂げてくださったことがあるから、ここに来るのです。そしてその礼拝から、言葉が溢れ出てきます。詩編の詩人は礼拝の場で語ります。『神を畏れる人はすべてここに来て、聞け』と。礼拝する者は黙ってられないのです。ペトロも同じでした。赦された者が、救われた者が、聖霊を注がれた者が、語らずにはいられなかった。それは特別な使命を持つ人だけのことではありません。今年度の主題『喜びを分かち合う』とは、このことです。特別な言葉を持たなくてよい、立派な証しでなくてよい。神がわたしに成し遂げてくださったことがある、その一点から言葉は生まれます。「神が私に成し遂げてくださった喜びを語ろう」そして、そのために「主よ、あなたの僕たちが堂々と御言葉を語れるようにしてください」と祈る必要があります。主の救いを確かにする礼拝を重ね、この喜びを語って一年度を歩みたいと思います。